

事例報告

「領域横断」しながら創造する～ 「セッション」の躍動

全学共通カリキュラム運営センター兼任講師 Akiko Grace

クリエイションの現場～インスピレーションの源泉としての音楽

2002年から20年余りの間、ピアニスト、作曲家として活動しながらアルバム制作、演奏活動、執筆活動をする中で、様々な芸術作品の作家とコラボレーションする機会がありました。絵画作品、彫刻作品、建築物、文学作品、映像作品など、他分野のクリエイションと横断的に交流し作品を創る現場はおもしろく、多くの芸術家・クリエイターにとってインスピレーションの源泉であると感じます。また、AIなどデジタル化、ネット化が進み続ける現在は、制作環境や発信形態が激しく移り変わるただ中でもあります。このような創作現場の激変の渦中、芸術の本質をしっかりと捉えた上で、分野を超えて先端の芸術・クリエイションについても考察する必要性を痛感します。受講生たちが対応力、瞬発力、発想力を磨いてさまざまなシーンで輝けるような原動力にしていってほしいという気持ちで講義「クリエイションの現場～インスピレーションの源泉としての音楽」を作っています。

横断型の講義「領域を超えてつなげる」

2023年度春学期の講義テーマを次に挙げます。

「クリエイションの現場～インスピレーションの源泉としての音楽」

講義テーマ 2023年度春学期

第一回 クリエイションの現場～発想の源泉、創造的な思考力とは

第二回 沈黙は聞こえるのか？～静寂と音とクリエイション

第三回 コミュニケーションとしての音楽、即興演奏とは～通奏低音からフリージャズまで*

第四回 クリエイション～映像と脚本と原作、ヒットする映画とは*

第五回 五感とクリエイション～味覚・触覚・嗅覚の創造活動

第六回 問いとクリエイション～クイズとアートと音楽と*

第七回 シュールレアリスムと音楽～コラージュとミュージック・コンクレート

第八回 建築とクリエイション～建築と音楽と高次情報*

- 第九回 頭の中の音楽～ゲシュタルトとしての作曲、夢の心理学
 - 第十回 ポストデジタルのVRと音楽～アナログの秘めたる力、AIの次に来るもの*
 - 第十一回 波動としての音楽～倍音と周波数、ピタゴラス音律とは？
 - 第十三回 メディアとクリエイション～ラジオと音楽*
 - 第十四回 創造のモチベーション～世界から見た日本の美意識*
- *はゲスト・スピーカー回

音楽を主軸として、他の創造領域と横断的な繋がりを持たせたテーマ設定を心がけています。超学際的な講義をどのように構成するのか、ゲスト・スピーカー回も含めていかに一つの「組曲」にするのかについて、私なりに工夫していることをご紹介します。

○主題と連動させた「曲」

各講義に直観的な繋がりを持たせるために、毎回、講義の冒頭に主題と連動させた楽曲を再生しています。例えば「五感とクリエイション」の回ではアルバム『フロム・ニューヨーク』¹から“TEXTURE”をかけています。これは「手触り」を音で表現した自作曲で、聴覚→触覚と感覚をまたがった創作の例として紹介しています。「即興演奏」の回ではキース・ジャレットのアルバム『La Scala』²から“La Scala, Pt. 1”をかけています。完全即興によるライブ盤で、即興でしか生まれられないリズム感や、即興の種類として最大の自由度がある独演による即興演奏というフォルム、演奏者の心理について解説しています。「沈黙は聴こえるのか？」の回ではアルバム『グレースフル・ヴィジョン』³から“Graceful Intermission”を紹介しています。これは4分18秒という長いサイレント・トラックで、ジョン・ケージの“4分33秒”と関連づけられることもあります。ジョン・ケージの作品や、サウンドスケープの概念など、現代音楽からの視点やサイレント・トラックを作成した意図について解説しています。

ゲスト・スピーカーとの学際的な「セッション」

「立教ゼミナール発展編」ではゲスト・スピーカー回が7枠ありますが、これまで音楽活動などを通じて関わってきた中から、それぞれの領域での第一人者にお声がけしています。これまで、バリー・アイズラー（小説家）、豊田啓介（建築家）、服部桂（科学ジャーナリスト）、池田宏之（映画プロデューサー）、松任谷玉子（ラジオ番組プロデューサー）、近藤仁美（クイズ作家）、宮澤正明（写真家、映画監督）、菟口賢一（音楽プロデューサー）、ヒダノ修一（太鼓奏者）（敬称略、順不同）などの方々にご登壇いただきました。

*1 From New York/ フロム・ニューヨーク (Akiko Grace) 2002年 日本コロムビア

*2 La Scala/ ラ・スカラ (Keith Jarrett) 2000年 ECM

*3 Graceful Vision/ グレースフル・ヴィジョン (Akiko Grace) 2008年 日本コロムビア

○「テーマ選び」～専門領域と音楽

ゲスト・スピーカー回は、互いの領域に共鳴する学際的なセッションでありたいと考えています。主題は、各専門領域と音楽が、クリエイションという観点から関わるような主題を提案し、相談しながら決定しています。事前の講義内でゲストのプロフィールや著作物を紹介し、受講者が各主題について想いを巡らす時間を作り、講義内での質疑応答に加えて、受講者からゲスト・スピーカーへの質問、感想をコメントペーパー経由でも伝えられるようにしています。ゲスト側からもフィードバックが嬉しいという意見をいただいています。

○「副テーマ」で領域をつなげる

講義全体のおもな共通軸は音楽ですが、「副テーマ（サブテーマ）」も意識しています。音楽では「主旋律」に対して「副旋律」という言葉がありますが、副旋律は様々な形を変えながら主旋律に寄り添って立体的な音楽を作ります。講義と講義をつなぐ主軸とともに、副テーマが同時に聴こえてくるとき、各テーマがより立体的に感じられると思います。自ずと副テーマで繋がっていくこともありますが、そのような流れを意図的に作ることもあります。次に具体例とともに解説します。

「クリエイションの現場～インスピレーションの源泉としての音楽」

講義テーマ 2023 年度春学期（抜粋）

第七回 シュールレアリスムと音楽～コラージュとミュージック・コンクレート
→アコースティック楽器 [アナログ]、電子楽器 [デジタル]

第八回 建築とクリエイション～建築と音楽と高次情報（豊田啓介、建築家）
→実空間 [アナログ]、3D 記述された空間 [デジタル]

第九回 頭の中の音楽～ゲシュタルトとしての作曲、夢の心理学
→ AI と芸術作品

第十回 ポストデジタルの VR と音楽～アナログの秘めたる力、AI の次に来るもの
（服部桂、科学ジャーナリスト）

第十一回 波動としての音楽～倍音と周波数、ピタゴラス音律とは？
→ピタゴラス音律 [アナログ]、平均律 [デジタル]

第十三回 メディアとクリエイション～ラジオと音楽（松任谷玉子、ラジオ番組プロデューサー）

→ AI アナウンサー

第十四回 創造のモチベーション～世界から見た日本の美意識（菰口賢一、音楽プロデューサー）

→アナログ録音、デジタル録音

この期間の副テーマとして、一つには「アナログとデジタル」があります。第七回、私は「シュールレアリスムと音楽～コラージュとミュージック・コンクレート」の講義内で、音楽におけるコラージュの実例としてアコースティック楽器と電子楽器の組み合わせについて解説しており、演奏と作曲の両面からアナログとデジタルの対比をしています。第八回のゲスト、豊田啓介さんは「建築と音楽と高次情報」の講義内で「コモングラウンド」という構想、都市や建築物といった実空間と3D記述されたデジタル空間を媒介する領域についてお話しされています。実空間、いわばアナログ空間をデジタル空間として記述する際、汎用性のある仕様でデータ化する、共通基盤についての概念です。第十回のゲスト、服部桂さんは「ポストデジタルのVRと音楽～アナログの秘めたる力、AIの次に来るもの」の講義内で、ニューラル・ネットワークなど人間の脳の働きを模したデータ処理方法を取り込むディープラーニングなど、いわばデジタルからアナログ・コンピューティングへと進化している動向とその展望について考察をされています。第十一回、私は「波動としての音楽～倍音と周波数、ピタゴラス音律とは？」の講義内で音楽理論の話をしていますが、倍音由来のピタゴラス音律と、周波数由来の平均律について解説しています。倍音やピタゴラス音律はアナログ的、十二平均律はデジタル的な音律と言えます。第十四回のゲスト、菰口賢一さんは「創造のモチベーション～世界から見た日本の美意識」の講義内で、アルバム制作におけるアナログ録音とデジタル録音の現場について解説されています。このように、アナログとデジタルというキーワードで繋がる考察が様々な角度から行われました。

また、同期間は「AI」という副テーマもあります。第九回、私は「頭の中の音楽～ゲシュタルトとしての作曲、夢の心理学」の講義内で、AIと芸術作品について話をしています。第十三回のゲスト、松任谷玉子さんは「メディアとクリエイション～ラジオと音楽」の講義内で、ラジオ番組作りの、予定調和でない現場の面白さについてお話しされ、同時に、ニュースではAIアナウンサーが導入されつつある現状についても考察されています。第十回のゲスト、服部桂さんの主題につながっていきました。このように講義同士がサブテーマで繋がる時、講義全体が多次的になり有機的な和声を奏でているように感じます。

○海外ゲスト・スピーカー

海外ゲスト・スピーカーとして、2022年度春学期に、欧米を中心に活躍するサンフランシスコ在住の小説家、バリー・アイスラーさんにご登壇いただきました。20年ほど前の初期作品は日本が舞台になっており、その頃からのご縁で「小説とクリエイション～創造する無意識」というテーマでオンライン登壇をお願いしました。講義は15時20分開始なのでサンフランシスコでは23時20分開始、真夜中の時間帯に加えて、オンライン環境で通訳をはさむ難しさを乗り越えて、興味深い講義が行われました。作品タイトルへのこだわりや、実在する都市を描くプロセス、国境を超えてメインキャラクターを描く際は「違い」より「共通点」を描くという人物描写の着眼点など、重要な

創造のヒントを共有してくれました。

「即興リレー」先の読めぬ展開～予定調和を超えて

私自身、「即興演奏」に魅せられて何十年も研究をしているので、講義内でも即興の臨場感と躍動感を盛り込んだ「即興リレー」という方式を盛り込んでいます。音楽だけではなく、言葉、絵図、映像などを用いて即興リレーが行えるように調整しているので、楽器や作画などの特殊なトレーニングを受けていなくても問題なく参加できます。「先の読めぬ」音楽とはいえ、即興演奏にはさまざまなフレームがあります。同様に、即興リレーでも一定のルールを作成し、その中で行います。現在は「小説編」「連想編」「キャラクターを動かす」「映像編(アフレコ)」「五感編」など9つのバージョンが出来ています。一つの正解や仕上がりの完璧さを求めるのではなく、発想力、対応力、瞬発力を鍛えながら仲間と「協奏」する楽しさを実感することを目的としています。回が進むにつれて心がほぐれ意外な展開や結末がうまれ、予定調和ではない臨場感とスリルが味わえるようです。

心に響く「体験」～音を体感する

アコースティック・ピアノなど有機的な音が心に響くような体験にするために、次のような場を設けています。

○「静寂を聴く」

「沈黙は聴こえるのか？」の回では、音楽を作る際のキャンバスとしての「静寂」を聴きます。講義室の空間で、実際に静寂を聴いていると、廊下の微かな足音、心臓の音、自分の顎の音まで聴こえるなど、予想以上に驚きがあるようです。作曲や演奏の基本となる静寂の存在を意識することにより、音に対するイメージを新たに描くことができます。その場で聴こえた音や心象風景から「即興リレー」連想編などを行う場面も設けています。

○「倍音を聴く」

倍音は、音楽の源泉であり、音階の成り立ちに関する大事な秘密の鍵が含まれています。倍音について話をするときには実際に講義室のピアノで低音部をゴオンと鳴らして一緒に倍音を聴きます。共鳴する音を聴きながら、周波数と音律の関係を音楽理論の面からも解説し、さらに、可聴音域以上の周波数帯の音も日常的に感受していることを、超高音から超低音まで解説し、日常の音や効果音と照らし合わせてそれらをイメージする時間も設けています。

○「ピアノの音から物語を描く」

「海」「予感」「お日さまの匂い」など、受講者がその場で浮かんだ題目から組み合わせさせて講義室のピアノで私が即興演奏し、それを受講者が再表現するという場を設けています。受講者それぞれの心に音楽から浮かんでくる心象風景を単語化し、そこから物語を創ります。講義全体として、受講者が行う表現方法として、音、言葉、絵図、映像、貼り合わせによるコラージュなど、広いバリエーションをもたせています。豊かな発想力を身につけ、専門分野の学びへのインスピレーションの源泉となることを期待します。

アキコ グレース